

テーマは「**かんしよく** **感触**」

ドキ²ワク²の世界へ

五感のなかで最も早く発達する「触覚」。日当たりが良く草木など自然あふれる第五保育園は、0歳児でも様々な素材に触れることができるとても良い環境にあります。「これ、なんだろうね」と保育者が語りかけた瞬間が、ドキドキワクワクの世界の始まり。脳への心地よい刺激とともに、新しいものへの好奇心が育つ扉が開きます。

令和7年
10月・12月

フワフワ柔らかいね

透けるほど薄く、まだ幼い0歳児でも扱いやすい花紙。保育者が「ひらひら〜」と舞わせると、手を伸ばしてキャッチ。ちぎったり握ったり丸めたりしながら、花紙の“感触”を存分に楽しんでいます。花紙を袋に詰めると……、かわいいリングに変身!!



秋風が奏でる落ち葉の音に誘われて、落ち葉の絨毯が広がる場所へ。着くなり、嬉しそうに声をあげながら縦横無尽に歩きまわる子どもたち。時にしゃがんで落ち葉を握りつぶしたり、また立ち上がって落ち葉を踏んでみたり……。

カサカサってするね

「カサカサってするね」と保育者が話すと、「カサカサ!!」と言葉が返ってきます。

日本ならではのオノマトペ。きっとこんな体験と感動の積み重ねから育まれていくのでしょうか。



五感の目覚めをともに

日々、初めての“感触”と出会っていく0歳児。

最初は、新しい素材に不安を感じて触れようとしないうちの子もいますが、保育者とともに指の先から足の裏まで全身で素材に触れる活動を重ねるごとに、新しいものへの抵抗感が薄れていきます。これからドキドキワクワクの世界への扉を開いていきたいと思っています。

かんしよく テーマは「 感 触 」

「これ触ってみる？」

歩行が安定し、探索活動が活発になる1歳児。自然豊かな第五保育園の環境を活かしながら、指先の器用さや全身を使った運動能力の発達を促しています。クラスでは、年間を通して“感触”が楽しめるよう、スライムやスクイズ、粘土にするための小麦粉や片栗粉、水や泥、落ち葉や雪や氷など様々な素材を用意しました。



どんなときでも...

主活動だけでなく、ちょっとした活動の間にも触れて遊べるよう保育室にはスクイズ、冷蔵庫にはスライムを常備しています。小麦粉に水を加えて成形したり、片栗粉に水を加えるダイラタンシー現象も大好きです。



季節を感じながら...

夏には、泥遊びにてドロドロの“感触”を、水遊びにてサラッとした“感触”を楽しみました。秋から冬にかけては、いろいろな形いろいろな大きさの落ち葉に触れました。夏とは異なるカサカサとした“感触”がします。そして、冬の2月待望の雪が積もりました。暖かい室内に冷たい雪を運んで、少しずつ溶けていく不思議な“感触”を味わいました。



いつでもどこでも...



あらためてプログラムとして取り組んでみると、子どもたちはあらゆる場面で“感触”を楽しんでいました。「(お湯が)あったかいね」「(布団が)ふわふわで気持ちいいね」など、日常の何気ない

“感触”を保育者が言葉にして返すことで、より“感触”が身近に感じられます。興味を示すタイミングは子どもそれぞれ。出したとたん触りにくる子、様子を見つつ入ってくる子、すぐに飽きてしまう子。一人ひとりに合わせながら、豊かな感性を育てていきたいと思ひます。

テーマは「しぜん 自然」

秋の宝物を探しに

季節の移ろいを感じられる、木々に囲まれた第五保育園。「今日は寒いね」「葉っぱ、黄色いの落ちてたよ」そんな子どもたちの気づきをもとに、「自然」の探索・収集活動から「自然物」を使った製作活動へのプログラムをスタートさせました。



令和7年
10月・11月

ポシェットをもって

自分だけのものへの愛着が高まる2歳児。自分でシールを貼った自分だけの道具を手に、近くの公園へ出かけます。「どこにあるかな? どこに隠れてるかな?」保育者の問いかけに、どんぐり、石や枝や虫などたくさんの「自然」を発見。自身がステキと感じた「自然」どれもが宝物、あつという間にポシェットは一杯になりました。虫さんも持って帰りたいたいけど、虫さんのお母さんが心配するから、バイバイしようね。



自然が奏でる音たち

拾ってきたどんぐりに色とりどりのビーズを加えカップに入れます。テープで留めて振ってみると「シャカシャカって鳴ってる!」そう、自分だけのどんぐりマラカスの完成。でも、僕のマラカスと君のマラカス、なんだか音が違うね……。



響きあうシンフォニー

それでは、みんなで並んで「どんぐり演奏会」を開催しましょう!! 園長せんせいも呼んで、好きな歌と一緒に披露するとたくさんの拍手がもらえました。なんだか嬉しいね。

作って、拾って、詰めて、奏でる。友だちとともに味わった一連の経験が、大きな自信へとつながっていきます。

自分を大事にしつつ「自然」の存在に気づき、「自然」とともに生きる自分、そして友だちとの調和まで感じることができました。



テーマは「色」

どんな色が好き？

「見て！今日〇〇色の靴、はいてきた!!」“色”にまつわる会話が、クラスのなかで飛び交うようになりました。

これまでの“色”を感覚として捉えていた時期を経て、“色”という抽象的な概念を認識し、実際の“色”と名前を一致させることができる『色彩認知の爆発期』を迎えた3歳児。この絶好のタイミングを逃すことなく、“色”が持つ不思議さや美しさに気づくことができるようプログラムに取り組みました。一般的な12色といった枠にはとどまらない、無限に広がる“色”のワンダーランドへ。色水や絵の具、米粘土など様々な素材を使いながら取り組みます。



令和7年
8月・10月



さあ、レッツゴー!!



暑い夏の日、

日陰で水遊び。

まず、3色(赤・黄色・緑)の色水をタライに作ります。透明な水にふわりと“色”がついていく瞬間を、食い入るように見つめる子どもたち。“色”の重なりや変化を見比べることができるよう、傘袋を用意しました。袋にひとつ色水を入れたら結び、別の色水を入れたらまた結ぶを繰り返すと、光に透ける“色”の層のできあがり。ふと「(混ぜたら)オレンジになった!!」と保育者に知らせる驚きの声。3色だけだったはずの傘袋に、新たな“色”が加わりました。

秋の遠足は動物園。保育者が大きな模造紙を広げて、キリンとライオンを描いてくれました。今度は、7色(赤・茶・黄色・緑・水色・桃色・黒)の絵の具。製作が進むにつれて、次第に混ぜ合わせて塗る姿が見られるようになりました。こんな“色”、豊かなキリンとライオン、動物園にいたらいいなあ～。



混ぜたら…



混ぜたら混ぜたら…

まもなく十五夜。
月見団子に見立てて、
4色（赤・黄色・青・白）の米粉粘土を使った製作をしました。

これまでの取り組みを通して、混色の楽しさを存分に学んできた子どもたち。すぐに友だちと「見て見て」と発見を教えあったり、面白い混ぜ方を真似したりし始め、あっという間にカラフル

団子でいっぱいになりました。ちなみに、子どもたちが見つけた一番の発見は、「（全部を混ぜると）灰色になる!!」ということでした。

第五保育園の西には野川が流れており、自然豊かな河原に降りて遊ぶことができます。ある日、「葉っぱが赤くなってたよ」と季節の移ろいに気づいた子がいました。さっそくみんなで散歩に出かける

と、夏に青々としていた葉っぱが黄色や橙色や赤へと変化していました。落ち葉を保育園に持ち帰り、ライオンのたてがみに見立てて表現しました。絵の具だけでは表現しきれない、自然界の奥深い“色”のグラデーションへの気づきが育まれました。



何いろなるかな？

このプログラムを通して、子どもたちは自分の知っている“色”を様々な素材の特性を活かしながら表現することができました。また、友だちのやり方を真似をしたり、自分の発見を知らせ合ったりと、“色”をきっかけに子どもたちの世界が横へとつながる様子は、まさに集団だからこそ得られる深い学びの姿だと言えます。

私たちの世界は、名もなき無限の“色”で美しく彩られています。クレヨン箱に並ぶ“色”を覚え、正しく言えるようになることも大切ですが、その間に存在する“色”に気づき、心動かされることの方がもっと大事な体験だと感じさせられました。

自分で好きな“色”を選び実際に混ぜてみることで、予想しない新しい“色”が生まれます。与えられた“色”を選ぶだけでなく、自分自身で生み出すという楽しさを学びました。この経験の積み重ねが、科学的探究心を支える基礎となります。

3歳児にとって、自分の好きな“色”を主張し、自己表現することは自身を肯定するアイデンティティの確立に直結する大切なステップです。今後も子どもたち一人ひとりが自分だけの“色”を見つけ作り出し、認め合えるよう援助を続けていきたいと思えます。



こどもの「すくすく×わくわく」をおうえん



テーマは「**かお**顔」

第五保育園の幼児クラスでは、運動会の彩りのひとつに、自画像を万国旗として掲げています。

友だちの“顔”から感情を読み取ったり、自分の気持ちを“顔”、いっはいで表現できる『社会情緒的認知の飛躍期』を迎えた4歳児。

このプログラムでは、自分の“顔”を客観的に捉えることにより、言葉で気持ちを伝える力や互いを認め合う心と自己肯定感を育てていきます。



“顔”ってなんだろう

保育者の問いかけに、「目がふたつ!!」「まんなかは鼻」

と元気な声が返ってきます。

でも、“顔”のパーツだけではなく、笑ったり怒ったりという表情の変化にも子どもたちの興味が広がるように、『お? かお!』と『かお かお どんなかお』という絵本を読みました。



令和7年
8月から10月

鏡の中の自分



子ども一人ひとりに鏡を用意し、自分の“顔”と向き合ってもらいました。

鏡をのぞきこんだ子どもたちからは、「私の目って、こんな形なんだ」「まつげ、長いね」「歯がいっはいある」などの声。

一番身近なはずの“顔”なのに、鏡の中には多くの発見が溢れていました。

さらに、友だち同士で互いの違いや似ているところに興味を持って関わる姿も見られました。



自画像描いてみると

鏡を使った観察を終えると、いよいよ自画像描画に挑戦です。「まつ毛描こう」と言って自分の見つけた特徴を描く子、「にっこり笑った顔にしてみる!」と言ってやりたい自分を描く子。

一筆一筆に4歳児ならではのこだわりを見せながら、クレヨンや絵の具を使って丁寧に表現していきました。

不安から自信へ

クラス全員が自画像を描き終わりました。最後は、完成した作品をみんなで見せ合う発表の時間です。

順番に自画像を披露していき、次は自分の絵に自信が持たず「うまく描けない……」と不安そうにしていた子の番になりました。モジモジしながら前に出ると、「〇〇くんの目、キラキラしてて素敵だね!」と肯定的な言葉を友だちにかけてもらいました。その子の表情はパッと明るく、安心感に満ちた笑顔へと変わりました。

仲間に認められる経験が、何より強い自己肯定感の種になる。この関わりのなかに、大切な学びの瞬間がありました。



みんな違って、みんないい

このプログラムのなかで、子どもたちは自分の顔の特徴を見つけて喜んだり友だちの良さを伝えあったりしながら、互いを認め合う関係を築いていました。自分の良さに気づき、それを誰かに認めてもらう経験は、これからの成長につながっていく自信の根っことなります。

子どもたちは、単に顔を描く技術を得ただけでなく、「自分は自分でいいんだ」という自己肯定感と、「友だちも素敵なんだ」という他者への深い理解を同時に育んだことと思います。



こどもの「すくすく×わくわく」をおうえん

テーマは「食」

生命のバトン

第五保育園には、常勤の栄養士・調理師がおり、調理業務だけでなく食育指導を補助しています。加えて、園舎の裏には小さいながらも畑があります。



おいしい!

5歳児は、知的好奇心が「対象の性質」から「対象の背景や成り立ち」へ移行する時期です。この発達段階を捉えて、単に「食べる」だけでなく、「栽培」「収穫」「調理」「分かち合い」という実体験を伴う一連のプロセスを通じ、

“食”への多角的な理解を深めるプログラムに取り組みます。

苦手な食材などあり、給食を減らす子も多いクラスですが、自ら命を世話し、収穫し、調理し、誰かと食べる経験を経て、自分は環境に働きかけて変化を起こせる存在であるという自己効力感も育てていきます。



令和7年度
通年

調理って楽しい!



栄養士と相談して、おにぎりづくりから、ピザづくり、フルーツサンドづくりと難易度を少しずつ上げながら、調理保育を行っていくことにしました。

ピザづくりでは、グループごと意見を出し合い具材を決定します。「何をトッピングすれば美味しくなるかな」と

いった問いかけを通じ、子どもたちは予測と発見を繰り返しながら“食”に向き合っていました。何より自分たちで作った“食”を仲間とともに食べる味は、格別でした。

どの回でも、一人ひとり慎重な動作で調理を進めていました。また、調理保育を終えるごとに、「次はこれを作ってみたらどう？」と提案する主体的・意欲的な姿勢は、これからの小学校生活そして人生を切り拓く大きな力となるに違いありません。



食材に触れる

「これは、どの野菜の苗？」概ね週1回ごとに栄養士がクイズを出してくれました。少しずつ、野菜への興味が高まっていきます。そして今年も、カボチャ、オクラ、キュウリ、サヤエンドウを栽培することにしました。畑づくりは、雑草抜きから。土の感触を感じながら耕し、肥料を混ぜてから、協力して畝をつくります。苗植え後は、支柱を刺すなど栽培環境を整えました。グループごとの水やりは日々の日課ですが、時に害虫の存在に気づき保育者と調べる姿も見られました。夏に入り収穫期を迎えた野菜から、一人ひとりハサミで収穫していきます。その野菜をデッサンしたり、その日の給食食材として提供するなど記憶に残る活動を積み重ねました。

秋からは地域の農家との連携により、園内では体験しきれない広い畑と触れることができました。農家の方からは、大根の種の撒き方や収穫方法を教えてもらい、どの子も真剣な面持ちで聞いていました。保育園からは距離があったので、頻繁に観察することはできませんでしたが、大根の重みや土の匂いなどを全身で感じつつ自分たちが種を撒いた大根を掘り出すのは、最高の体験です。そして、お世話になった農家の方を保育園の給食に招待しました。



収穫した大根が入った給食をともに味わい、「おいしいね」と言葉を交わす喜びは感謝の心を育みます。食後に、その感謝を手紙にして渡しました。自分が地域社会のなかで生かされていることを実感した瞬間でした。



生きる力を育む

その他にも多くの食育に取り組みましたが、一番の驚きは、野菜嫌いだっただ子に「自分が育てたから」と挑戦しようとする姿が生まれたことです。食べさせる“食”から食べたいと思う“食”への変化を感じました。

栄養士のクイズで得た知識を自慢気に保護者に話すなど、学びは家庭にも広がっています。農家の方へ感謝の手紙を渡す姿には、地域社会の一員としての自覚と誇らしい年長の姿がありました。

自分の手で命を育み、誰かを笑顔にした。この体験は、小学校という広い世界へ羽ばたく子どもたちにとって揺るぎない「生きる力」の根底を支える自信となったと信じています。



こどもの「すくすく×わくわく」をおうえん